

中澤 横沢さんのお名前は「ヒョウ」と読むのが正しいのですか？横沢 何でもいいんです。正しくは「タケシ」ですが。

中澤 大山さんも「カツミ」ではなく「カツヨシ」が正しいんですけど、誰も「カツミ」としか言わない。今や本人も「カツミ」と言っています。

それは別としてお忙しいところ、皆さんもそうですが、ありがとうございます。

この会の主旨は、これから作って行くことでもあるんですが、お一人の方をサカナにしてテレビあるいはラジオのことをさまざま語り合おうというものです。今回は横沢さんに来て頂いています。横沢さんはこんなことには馴れていらっしゃるし、このみなさんも横沢さんはこんなことを話すと分かっているしやる。そこでいままでと違って一枚も二枚も横沢さんの皮をひんめくって、例えば「俺は報道の話がしてみたい」と

いうことであればそれはそれで素晴らしい。「横沢さん、普段はそんなこと考えていたんですか」となればいい。「いやいや、本気で俺はやってきたことを確かめてみたい」ならそれもいい。

ざっと一時間くらい話をして頂いてその後皆さんで話を盛り上げてください。

実は私は横沢さんにたった今初対面のご挨拶をしたところで、皆さんの方が親しくお付き合いなさっているのだと思います。「テレビを吉本化した張本人だもん」とニヤリと笑うような人が沢山集まっているのだと覚悟なさって存分にお話頂ければと思います。

横沢 私は「放送人の会」に入会ほやほやです。全くの新人で、皆さんはほとんど先輩に当たる方でしょう。これはえらいことになったなと思っています。まあ、こうなるとはある程度覚悟もしております。せっかく話をしろということなので、ふだん感じているよ

うなことを話してみます。

私はフジテレビに三十三年か三十四年いまして、その後吉本に入り、丁度十年になります。そろそろ歳なのでやめさせてくれとお願ひしております、多分来年には吉本を卒業することになると思います。

現在は吉本で楽なポジション、中二階みたいなどころにいて、あと鎌倉女子大学で週二回ほど教えています。

メディアからプロダクションというかコンテンツ・サイド、やぐざ稼業へと両方行っている人は少ないかと思えます。今私は出入り業者の立場で放送局を見ています。自分が局に居る時は気がつかなかったのですが、テレビ局、特にキー局は巨大な権力ですね。城壁のような感じを受けます。私どもの側からはなかなか攻め込めない、中に入り込めない部分があります。吉本興業はお笑いタレントを放送に出して頂くのが仕事で、今も

新人を何とか出演させてくださいとお願ひに行くのが重要な仕事です。当社の七割くらいはテレビ局からの収入に依存しています。

と言いながら、この地上波はあと何年もつのだろうか？というのが私どもの最近のテーマです。いずれテレビ局からの収入は減ってくるだろう。そうなら代わりを何で稼げばいいのか？このテーマは多分多メディア化し、いろんなメディアが現れて少しずつ侵食しているからでしょうが、それでも相変わらず地上波のキー局は圧倒的な力を誇っています。私どもプロダクションとしてはこのテレビのパワーがいつまで続くのかと考えざるを得ないのです。

そのために何をしているかというところ、自分のところで作る、自分で配信できるような企業にしようと考えています。大きなメディアになる必要はないかもしれないが自分で配信するという企業イメージは持ちたいと思います。ブロードバンドをKDDIと組んでファ

ンダンゴという会社を作ってやっています。まだ全然儲かっていませんが、この会社をキーのしてケイタイとの接点を探したりしています。またTEPCOさんはいま光ファイバーのケーブルをどんな敷設しておられますが、このソフトをやっています。これは加入者が今九万くらいで、まだまだです。東京電力のエリアです。からおのずと制限もあります。いろんな問題があります。とにかくやっています。メディアの状況はドラスティックに変わりとつあると感じています。古い放送人ですが、それは感じます。

先ほど大学で教えていると言いましたが、大学ではびっくりすることが沢山あります。二十歳の女子学生たちにはラジオとの接点ほとんどありません。彼女たちにとってラジオというメディアはもう存在しないのです。これはショックでした。受験の時深夜聞いたラジオとか、青春とリンクして記憶しているラジオ体験がないので

す。まったく要らないらしいのです。その話をニッポン放送の亀淵にしますと、キョトンとして「そんなことはない」とおっしゃるのですが、私が聞いた六百人の学生のうちラジオを聴くというのは僅か三人でした。

何しているかというパソコンと向き合っている。あとバイトとケータイでメールの交換です。

ではテレビはどうかというところでも大きく変わっている。私は授業である日「ザ・マンザイ」の中の「紳介、竜介」「ツー・ビート」を見せて感想を尋ねると、みんなしんとしている。さらに尋ねると「先生、早口で何言ってるのか、全然分からない」と言うのです。大きなスクリーンに投射して部屋を暗くしていますから、かなり集中して見ているのに分からない。

その週自宅で「エンタの神様」を見ました。若手のお笑いタレントが出て、若い視聴者にそこそこ支持されている番組です。見てい

るとネタに全部画面スーパが入る。あのスーパがないと今の若い人は理解できない。われわれから見ると「あのスーパは何だ」と思いますが、若い人には必要不可欠なんです。

ということはテレビと対面したときの視聴の姿勢が全然違う。何かしながらちよくちよく見る。作品をしつかり見て感動するような視聴態度は希薄です。一方テレビ番組は分かりやすく、丁寧にとどんどんスーパをふやす。どちらが悪いのか分かりませんが、テレビがそんな視聴者のレベルに合わせて番組を作るのですから、今テレビを見ているのはアホばかりです。

つらつら自分のことを考えるとテレビについて語ろうとすると困ります。実はテレビを熱心に見ていないのです。オリンピックは年甲斐もなく夜中まで起きて見ましたが、何故見たかという、世の中いやなことばかり起きるからでしょう。子供を川に放り込んだと

か。最近「川」という言葉を聞くという気持ちがありませんね。殺伐とした事件が多いし、イラク、北朝鮮の問題にしても愉快になることはない。オリンピックはつかの間のやすらぎを与えてくれました。急に一等国民になった気分でした。大きなスポーツイベントはなっていますね。

今の視聴者はそんな「いやし」をまずテレビに求めているのでしよう。私には仮説がありまして、今の視聴者の視聴態度は極めて消極的だと考えています。朝、新聞のテレビ欄を見て、「これとこれは見たくない。これは許せる。見てもいい」というものを見ている。そうでない「これを見たい！」というポジティブな視聴態度は非常に少ない。そんな気がしません。

今番組を作っている人たちには歴史的考察が欠けています。ものごとを歴史的に見る、因果関係、あの人の前歴はこうだ、故事来

歴、いろんな形がありますが、そんな風に時系列的なものごとを考えることを古臭いと思つていません。その結果おざなり、その場しのぎになり易い。

若者は歴史的にものを考えるのが嫌いなんです。自分たちには要らないと思つている人が多い。現在テレビ・ラジオ局で番組を作っている若手には理詰めでものを考える人はほとんどないでしょう。

一方で変にIQが高く、小器用です。うまくまとめる能力は高い。つまりとんでもない人は出ないんですね。

私のまわりでは、さんまとか紳介とかが頑張つていて私はぬくぬくとしていられますが、今後大スターは出てこないと思います。適当な中くらいのサイズの才能は出てきます。今、ちよつとしたお笑いブームで、当社にも若手がどんどん出てきて、いい状態ですが、80年代のお笑いブームと比べると景色が全く違います。

80年代はテレビ局主導で、テ

レビ文化として漫才その他のお笑いが再発掘された。古めかしい演芸を見せ方を変えて新しくした。そのときには十組くらいの人しかいなかったと思えます。やす・きよ、ツイビート、紳介・竜介、

ザ・ボンチ、とかいますが現在あらかた残っています。その時間与できたのは太田プロ、吉本興業、松竹芸能この三社くらいです。

今のお笑いはライブハウスやごく小さな劇場などで十年お客さんを前に汗をかいてきた人たちがブレイクした。それをテレビ局がおつかなびつくり拾ってみると意外に数字が取れる。それで広まっているものです。そして従来は参入してこなかった渡辺プロやサンミュージックが学校を持ち、若手を育成して参入しています。

つまり下から積み上げてきたもので、今テレビに出て若手といっても十年はやっています。80年代は十組くらいと言いましたが、今はうじやうじやいる。名前を言っても顔を見ても分からないほ

ど、死ぬほど沢山います。これを支えているのは若い女の子です。男のファンはいません。

かつてアイドル歌手へ向かつていた人たちが歌を見限つてこちらへ来ています。プロダクションも歌では食えないからこちらにシフトしているわけです。

今回は漫才ではなくてコントです。より分かりやすく、やつている人のセンスがより問われている。ネタはネタですが、漫才では言葉で、コントは言葉プラスアクションで、その分言葉が弱つていきます。言葉だけで笑わせるのは難しい時代です。

今後は中途半端なそこそこの腕前を持ったお笑いタレントがどんどん出てくると思います。水面下にはいっぱいいます。その人たちは五年後十年後はどうなるか？多分ほとんどいないでしょう。あつという間に忘れ去られる運命にあります。

そんなお笑いタレントが何故そんなに続々出てくるのかは、若い

女性に聞くとわかります。「笑いでしかいやされない」と言うのです。いやし効果は笑いだけ残つていたのでですね。その効果がある間はこのブームは続きます。

先々週若手お笑いタレント八組が登場する「LOUGH」という催しを吉本が主催、NHK文化センターの協力でNHKホールでやりました。三千五百円のチケットで昼夜二回、二十分で完売です。

これにはNHKもびつくりして「紅白」よりこつちをやった方がいいなんて声もありました。そんな勢いです。客はほとんど若い女性。連れて来られたらしい男性も希にいます。

今若い視聴者のテレビ視聴の原点は「自分がいやされるかどうか」。それに尽きると思います。昔もそうだったのかもしれませんが今は世の中ささくれだつていまずからね。

私の話はこのくらいで：

中澤 お話を伺うと、テレビの視聴者は今や若い女性にしぼられて

きているようですが：

横沢 いや、テレビを一番熱心に見ているのはおばさんだと思います。五十代の女性です。彼女たちは朝から見ている。テレビ通はあの人たちです。

伊藤 「冬のソナタ」を見る世代ですね。

横沢 そうです。「冬のソナタ」。僕は二回見てもう勘弁してくれ、と思いました。今野さんはどうですか？

今野 やはりてれますね。僕も武蔵野大学で教えていて、八十人の中に四・五人韓国の留学生がいま。彼らにドラマを作らせると全くあの調子です。非常にストリートです。恥ずかしがらない。大学生は一般に韜晦というか、わざと難しく作りますね。それをやらない。「非常に愛してる！」とか、こんなにストリートで大丈夫かなと思います。 「冬ソナ」が出て初めて分かりました。民族性なんて単純に言ってしまうたくはないんですが、やはり民族性ですね。

全く違います。同じゼミで日本人

の繊細さ、優しき、曖昧さを彼らは許さない。「許さない！」とばつと言って一瞬険悪になります。

撮影現場に行つて何回か同じことを繰り返すと日本人は「もういいじゃない」となるんですが、彼らは十回でも十五回でもNGを出

す。まわりの条件一切お構いなしです。兵役に行つてますから体力もあります。

それが私どもが置き忘れて来た純粹さの原点で、あのストリートさにおばさんたちははまつちやつたのでしよう。見て僕も恥づかしいです。

キムタク的な、ちよつとずれた感じ、それが知性とか現代感覚だとか、五十代女性はあんなタイプが好きだと思ひ込んでいたのですが、実は全然違うタイプを求めていたんですね。

私たちが金鉱あるいは金脈を探り当てられなかったわけですが、マーケツトリサーチからでは絶対ヒット作は生まれえないということ

で、その証拠みたいなものです。

キムタクみたいなドラマはあると分かりますが、「冬ソナ」以前に「冬ソナ」みたいなドラマがあることは絶対に分かりません。自分の潜在意識の中にそれを欲していることも分らない。

川竹 NHK出身で女子大に十八年いますが、二十年前の女子大生は現在間違ひなく「冬ソナ」ファンです。このドラマが韓国で放送

されたとき日本では誰も気にしなかったのですが、たまたま衛星放送に話が持ち込まれ、他なら深夜にやるのでしようが割合いい時間に放送してファンがつかまりました。

一所懸命見る人がいるというので「ステラ」で大宣伝をし、広がりました。今や五十代から、六十代、七十代、八十代まで見ています。これはあだやおろそかなことではありません。

今NTVが朝十時台で韓国ドラマを放送していますが、これもDVDなど売れています。これまで日本は韓国を何となく

下に見る傾向があつて、韓国との共同制作をしても日本での放送には熱心ではなかった。それにNHKが目をつけマーケツトを開拓した。

先ほど横沢さんが一番テレビをよくみているのは五十代女性だと言いましたが、確かにそうですね。若い女性は時にテレビ番組に夢中になりますが、自分から探して見ることはしない。誰かが出演するから見るので、誰も出演していないと見ない。今の編成は少しさもない編成で、正時でなく54分スタートとか、「冬ソナ」が当たると「冬ソナ」まがいがわーと出てくるとか、そんなさもないことをするなと思います。

いま若い人が喜ぶのは好きなタレントが台本もなくギャグの応酬をしたりする番組で、お笑いとも言えないのですが、そんな番組が多くなりました。若い人たちは「誰がこう言った。やつつけられた」などと愉しんでいます。どこからこんなことが生まれて、こ

れはどうなるのか教えて欲しいのですが……

中澤 一所懸命テレビを見ないというの、一頃言われたテレビ離れと同じようなことでしょうか？

吉田直哉さんが作った時から「放送人の育成」を謳っているのですが、放送人になりたい人はいませぬ。

は過去の作品をほとんど見せません。先週は一九五六年に作られた羽仁進の「絵を描く子供たち」を見せました。この作品が当時何故革命的だったか、メッセージがな

現在がわからなくてごちゃごちゃになる。彼らにアンケートして「今注目しているドラマは？」と聞くとまず「セカチュウ（世界の中心で愛を叫ぶ）」です。あれは現在と過去がごちゃごちゃになっても一人の男と一人の女の物語だから、

中澤 ということはテレビゲームより面白いテレビ番組がないということですか。

中澤 空気と思っていると「映像」という文字には結びつかないのですか？

そんなことを言います。そう言わないと過去のことは全く分かって貰えない。しかしそういう話をすれば積極的に聞きます。自分の存在感はかろうじてそんなところ

「人間の証明」が中々出て来ず、「逃亡者」は黙殺です。そりやそりややこしい。昨日でしたか「24・トゥエンティフォー」を見ているとアメリカはもつとラジカルで、これは私が教えている女子短大のオネエチャンにはまず無理です。

横沢 うちの子もそうですが、テレビゲームでバトルなんかやって負けるとわーとやめちゃいますね。もう一度出来るから。それに馴れた人は考え方が違う。僕らは放送は一回しかない、とっています。彼らはDVDで出ると分かっているから好きなのだけ選んで見れば良いと思う。

今野 今も重要なメディアですし日常的には見られているのですが、かつてのように作り手とのコミュニケーションが成立することがない。絶望的です。放送に対する関心はないのですが、映像に対する関心はある。

松尾 先ほど80年代の喋くり漫才を聞いていると全然分からない、スパーがないと分からないということについては私も同じような体験があります。私は大学でドラマ論をやっていますが、ここ

「人間の証明」はそんなに難しいドラマじゃない。しかし今の子の興味はストーリーを追うところと別のところにある。先ほど歴史とおっしゃったけど、今の子にとって歴史はないんです。歴史の代

今野 私は大学で映像学を教えますが、新入生に何故映像学科を選んだかを作文に書かせるとテレビを挙げる学生はまずいませぬ。ほとんどが映画かアニメ、CGです。武蔵野美大のこの学科は

今野 先ほど横沢さんが歴史的な見方が出来ないと言っていました。それは日頃から接していないからだと思います。講義のなかで

4・5年、彼らはドラマを見せるとストーリーの展開を追うことができない。見せると回想シーンと

「人間の証明」はそんなに難しいドラマじゃない。しかし今の子の興味はストーリーを追うところと別のところにある。先ほど歴史とおっしゃったけど、今の子にとって歴史はないんです。歴史の代

わりに彼らが見つけたものがあるはずだと思います。それが見つけたい。

横沢 見つけたいですね。彼女たちは代わりのものを何かゲットしてますかね？

北村 してないでしょうね。先ほど番組制作者に歴史的考察がかけられているとおっしゃいましたが、二番目におっしゃった因果関係、これを日本は一九九〇年代に失ったようです。こうすればこうなる、

このカットで人間を切れば血が出る、こんな関係が分からないという事件がいっぱい起こっています。歴史的考察より、今こうすれば将来こうなるといった発想すらないのだと思います。

それがテレビを覆い尽くしているので、私には理解できないドラマ、信じられないドラマがあります。

松尾 80年代漫才ブームの後、トレンドドラマが出てきました。この時から今日に至るわけですが、あのころの「男女7人：

「東京ラブストーリー」、「同級生」では若い男、女の仲間がいて、流行りだした合コンがあつて、男が四人で男が五人とか、逆もあつて一人が余る。幼稚園の子取りゲームと同じで、余った誰かがふられる。さんまがふられる時もある。鶴太郎がふられることもある。大体そんな構造のドラマです。

つまり商品を選ぶように愛を選ぶ、選ぶためには情報が必要で、消費者への情報が氾濫している中で育った彼らはそんな選ぶための情報感度は高感度だと思いません。

「冬ソナ」や「せか中」が出てきたとき、そんな記号的な選択にどんな付加価値がつけられるのか。サキちゃんだのアキちゃんだのと言っていた三十を過ぎた男が、それを一生の負い目に生きていくというのが「せか中」ですが、そんな物語が彼女たちにとって物凄く新鮮なのです。一対一という物語をわれわれは「野菊の

墓」をはじめ文学の主流と想ってきた。多様さの中で何を選ぶかという形で育ってきた人たちが突如一対一に出会う。僕らとしては当たり前前で、昔「愛染かつら」でやったり前で、昔「愛染かつら」でやったり前でないか、と思うのが彼女たちには新鮮で分かりやすい。

今のパブオーマンス、お笑い、ゲームというのはよく分かりませんが、小さなライブホールのような設計でやっていますね。コメディでもコントでもなく、同窓会のおふざけの要素もあり、そんな様々な要素を私たちのためにやってくたさると、汚いお姫様ですが周りで見ている。そんなお姫様との関係ですね。

さつきゲームとおっしゃったけど、ゲームの中の1か0、プラスかマイナス、そんな中にばかり入っている、人間だからそんなセリフを求めたがるのではな

いかと思います。武谷 いま横沢さんの話で、笑いの仕掛け人が笑いについてテレビに展望がないとの話を伺って驚い

たのですが、これだけメディアが増えたと人間の関心はそれほど熱中できるものがなくなるのかと思います。

ライブハウスで汗をかいて育ってきた芸人をテレビは拾い上げてくる時代で養成はしない、つまりプロデュース的な仕事になっていくわけですが、ライブにはやはり笑いの鉦脈があるのでしよう。

ドラマは一視聴者として見ていますが、先日受賞した「白い巨塔」はテーマに今日性が**あり**、視聴率も取りました。あんなドラマが見たい。この会には今も現場でドラマを作っておられる方が多数いらつしやいますが、放送は結局自分でやりたい志があつてやるしかない。教わってできるものではないと思ってきました。

日本では組織の中で個性を生かすことは難しい。横沢さんは組織を超えてやつてらつしやるので刺激を受けました。

「冬ソナ」については私は韓国に育ったので思いますが、風景は

セットで綺麗に仕上げています。様式です。音楽は癒しのもので、台詞も選んで作っています。先日NHKが八時台に音楽特集をやっていました。綺麗なカットを選んでいましたね。

荻野 読売テレビで長年作る側でしたが、今は女房と朝のワイドショーも見えています。テレビは窓のようなもので、向こうに野球場、劇場そして大道芸も見える。好きなものが選べて非常に便利です。

そうして見ていると、作る側にこれを見てくれという覇気というかそんなものが乏しいのじゃないかな。読売テレビから社報が送って来ますが、そこに昨年度の表彰が出ています。そこでのコメントには必ず視聴率を書いてある。これは視聴率は取れなかったけど表彰するというのは一本もない。これは読売テレビだけではないでしょう。

横沢さんはフジテレビでリーダーであったし後継者を育てる立場にもあったと思いますが、今の作

り手をどう思いますか？

中澤 テレビ論をやっていると必ず制作者の能力、意欲そして視聴率の問題が出てきます。しかし今日はたまたま教壇に立っている方のご発言が続いて、制作者の立場でも視聴率からでもない発言が聞けました。そこに面白い窓がひらけそうなのですが、その前に横沢さんから視聴率論を……

横沢 そりゃ電通が一番いかんでしよう。数字を営業に結びつけたバカがいて、それを皆信じてしまった。

僕たちが思っていた視聴率と今現場でやってる人の思う視聴率は全然違います。